

文学賞力 半空文学賞 香川県高松市

審査員はお客さん 小さなカフェバーで 生まれた文学賞

香川県高松市瓦町のカフェバー「半空」が主催する半空文学賞が、ユニークな試みとして注目されている。審査をするのは、店に来るお客さんたち。第3回の企画では、地元鉄道会社とのコラボも実現させた。

「うわの空」「どっちつかず」を意味する店名の「半空」は、カウンターのみのこぢんまりとしたカフェバーだ。家庭、職場、学校などで背負う肩書きを降ろせる「第3の場所」というコンセプトで、店主の岡田陽介さんが2001年(平成13)に始めた。珈琲と本と音楽が人と人をつなぐツールになれば、という思いでつくった空間だ。

まる文章量ならOK。数行の詩でも小説でも良い。持ち込みか郵送のみの受け付けとした。審査員は半空に来店するお客さんで、気に入った作品に一人一票を投じる。

第1回のテーマは「珈琲」で、応募数は68作品だった。第2回は「音楽が登場する文章」がテーマで、地元だけでなくSNSを通じて広く話題となり、香川県以外の地域も含め97作品が集まった。この回から、賞品を出したいという協賛者も加わるようになった。

第1回、第2回ともに100人強の読者が投票し、作品選びは真剣そのものだった。「お客さん同士の話し合いも大いに盛り上がり、書き手、読み手ともに文学を身近に感じる機会が増した」と岡田さん。

第3回は、地元の高松琴平電気鉄道、通称「ことでん」とのコラボを実現させた。「自分が乗る電車の中で、その電車にまつわる小説が読めたら素敵じゃないか」。ダメ元で「ことでん」にかけ合ったら、なんと社長の真鍋康正さんが大の文学好きだった。

こうして第3回の半空文学賞は、「ことでんストーリープロジェクト」の名で作品を募集。210作品の中から11の入選作が選ばれ、冊子にまとめられた。「冊子を電車内で読んでいる人を見かけるとうれしくなります」と岡田さん。

「文学を起点につなげられるものはたくさんある。ワクワクしたりドキドキしたり感動したりすることは、人を引き寄せる大きな引力。自分の生まれ育った香川県には思い入れがありますから、今後も魅力的かつ引力のあるアイデアで香川の人々の日常を豊かにできたらと思っています」

現在は第4回半空文学賞のエントリーを受け付け中で、テーマは「家族」だ(2019年1月31日締め切り)。今回は、大賞を絵本にする「絵本ストーリープロジェクト」となる。このユニークな文学賞が、今後どのように発展していくのか、興味津々である。

(鈴木正幸)



1 「ことでん」の真鍋康正社長(左)と岡田陽介さん(右)。互いに文学好きだったことから、コラボレーションが成立した。2 第2回の受賞者の林鶴子さん(左)に記念のトロフィーを渡す岡田さん。3 半空の従業員とともに。4 第3回「ことでんストーリープロジェクト」の受賞作をまとめた冊子。5 店や地元には第4回半空文学賞のポスターが貼られている。